

外国語活動における児童の心理的特徴の分析と今後の課題： より良きカリキュラム作成に向けて

永井 崇^{*a}
佐久間 康之^{*b}

「外国語活動」必修化の折、学校以外での英語学習の有無及び学年間の心理的特徴について小学校5、6年生を対象に分析を行った。学年間比較における主な類似点は、両学年ともに簡単な英単語を言うことができ、英語圏の文化に興味を抱くものの非英語圏への興味は希薄であった。一方、主な相違点は、5年生のほうが周囲との英語によるコミュニケーションに好意的であるのに対し、6学年の学習者（特に学校以外も含む英語学習者）のほうが、高度な記憶ストラテジーを使用している傾向が見られた。また、学校以外での英語学習の有無に関する比較において、学校以外も含む英語学習者のほうが、全体的に外国語活動に対し好意的、積極的で、上の学年ほど、英語学習の効率化が高く、非英語圏への興味・関心も高かった。カリキュラム作成にあたり、言語的知識のみとらわれることなく、既存の知識を基に多角的視点で推論することで成し得る活動を通して、学校以外の学習条件（英語の塾等）では得ることができない貴重なコミュニケーション活動の創意工夫が必要と言える。

〔キーワード〕 自己評価 言語に付随する内容 学校以外での英語学習の有無 記憶

はじめに

本校（福島大学附属小学校）の外国語活動に関する本格的な取り組みの伝統は極めて浅く、2009年度から外国語活動の移行期として『英語ノート1, 2』を基にクラス担任が取り組み始め、2010年度に「外国語活動研究部」が発足したばかりである。このような状況から、各指導者の外国語活動の指導経験年数は浅く、外国語活動と中学校英語との違いを正確に理解した上での指導体制作りが急務でもある。この点で両者の特徴の違いを最初に整理しておきたい。

学習指導要領における外国語活動の目標は「コミュニケーション能力の素地」を養うことである。また、外国語（英語）自体の学習目標は「英語の音声に慣れ親しむ」ことを中心としており、英語の文字の読み書きを求めるものではない。外国語活動は英語を対象としてはいるものの、言語を明示的知識（統語構造、音韻構造等の知識）として正確に習得することを目標としてはおらず、いわば英語の水遊びに過ぎず、とりあえず英語に触れ、使用してみる（手続き記憶）、無意識的に英語に触れる（潜在記憶）レベルのものである。一方、中学校の教科としての英語は、英語に関する様々な知識（意味記憶）を正確に意識的に記憶（顕在記憶）しなければならないものである。以上のことから、両者において、授業で学習者に求める学習の認知的レベルは明らかに異なるものと言える。また、授業で使用するテキストに関して、中学校の英語では文部科学省

検定教科書を使用するが、外国語活動には教科書がなく、文部科学省で配布している『英語ノート1, 2』は教材にすぎず、その使用の有無は授業担当者に委任されている。しかしながら、全国的傾向と同様に県内においても英語ノートに基づく外国語活動の実施が大多数を占める現状にあり（佐久間, 2010）、各学校の実状にあった指導内容の創意工夫がこれからの課題であると言える。

本校の実態として、学校以外で英語の言語的知識を明示的に、意識的に熱心に学習する児童が目立ち、特に学年が進むにしたがってより強い傾向にあり、高学年では過半数を超えている。この一方で、学校以外で英語に触れることが皆無に近い児童もいる現状から判断し、「外国語活動」の目標に照らしつつも、両者の特徴を生かしあえる、本校の実態に見合った独自のカリキュラムを作成していく必要があると感じている。本稿では、カリキュラムの作成に先立ち、現状として、「外国語活動」における児童の心理的特徴を多角的視点から調査し、実態を掌握し、今後の指導における重要な点を考察していく。

I 研究目的

本研究の目的は、外国語活動に参加している児童の心理的特徴について、以下の問題を検証することにある。

1. 外国語活動が影響を及ぼす心理的特徴（言語、文

* a 福島市立鎌田小学校, 研究調査時, 福島大学附属小学校

* b 福島大学人間発達文化学類

化への興味・関心、認識及び記憶ストラテジー等)を探る:年数(5学年,6学年)による比較を通して,類似点,相違点を分析し,学年に見合う指導内容を検討する。

2. 外国語活動以外の学校以外での刺激(塾や家庭学習等)の有無による心理的特徴を探る:学年毎に有無の比較を通して,類似点,相違点を分析し,外国語活動の目標との整合性を分析する。

II 研究方法

2.1 参加者

平成22年度福島大学附属小学校の5学年及び6学年を対象とし,5学年は3クラス,6学年は4クラスである。以下の各学年の人数は在籍者数ではなく,本調査に参加した児童数である。なお,参加者の中に長期海外経験者である帰国子女等が多少(5学年3名,6学年2名)含まれている。

5学年:110名のうち学校以外での英語学習者は63名であり,全体の約57.27%にあたる。

6学年:149名のうち学校以外での英語学習者は87名であり,全体の58.39%にあたる。

2.2 外国語活動の時間数及び指導内容

各学年ともに年間35時間(1時間=45分)の外国語活動を実施している。授業形式は,全クラスとも授業実施回数の約3分の2がクラス担任のみによるもので,残り約3分の1は英語圏の母語話者とのティーム・ティーチング(以下TTと表記)である。

指導内容は,文部科学省の『英語ノート1,2』を基本として行い,適宜,子どもの興味・関心をひく資料を用いたり,歌やゲームなどの活動を行っている。その中で,子ども同士及び教師と子どもの関係性を深める授業の在り方を求め日々実践している。授業実践を繰り返す中で,特に大切にしている点は以下の3点である。

1) 子どもがかかわりたくなる教材の開発

子どもたちのもつ常識や固定観念等が覆るような教材を積極的に取り入れることで,外国と日本の相違点や共通点などについての気付きが生じ,学級の中に自然と子どもたちの間でコミュニケーションが生まれるようにしている。

2) 子どもが主体的に思考する授業展開の工夫

子どもたちの好きなゲームや歌等を取り入れることで,「楽しかった」「面白かった」という気持ちをもたせながらも,活動の中で「あれっ?」「どういうこと?」「なるほど」という興味・関心を持って意識的に学ぼうとする姿が見られるような授業展開を構想している。

3) 子どものかかわりを生む教師の働きかけ

教師が活動の中で見られた子どもの気付きや視点の良さなどを見取り,子どもの良さを称賛し学級全体に広げていくことで,子ども自身が知らなかった新しい世界の存在を知り,自己の世界観の広がりに対する喜びや達成感・満足感を抱かせるように教師が働きかけている。

2.3 実施時期及び調査内容

2010年度の2月に児童を対象にクラス毎にクラス担任が5件法によるアンケート調査を行った。調査内容はSakuma(2009)に基づくもので,学校の指導内容と異なる項目は一部を削除して実施した。調査項目は,表1の通り,7つのセクション,全75項目から構成されている。

表1 アンケート調査の項目数と内容

セクション	項目数	内容
I	11	外国語活動で楽しいこと
II	17	自己評価
III	11	英語を駆使して行ないたい内容
IV	7	英語圏に付随する内容
V	7	非英語圏に付随する内容
VI	6	日本語と英語の相違
VII	16	英語の記憶
合計	75	

III 結果と考察

3.1 記述統計量:学年毎の全体的な傾向

各学年で学校内のみの学習者と学校以外での学習もしている学習者が混在している状況において,全体的傾向を探る意味で,学習環境間(学校内のみ,学校以外も含む)の有意差($p < .05$)が無い項目で平均値の高い項目及び低い項目を分析した。高い項目は平均値が5件法で3.95以上(四捨五入で4.0)とした。また,低い項目は平均値3.0未満を対象とした。

3.2 5学年

結果は表2及び表3の通りである。

これらの表から特徴として以下の点が挙げられる。

- ・ゲームを通して学習や英語で話したことを周囲にわかってもらえることが楽しい(No.1,4)。
- ・簡単な名詞(色)は英語で言える(No.23)。
- ・海外旅行での英語の使用や英語圏の景色やスポーツに興味を持つ(No.29,45,46)。
- ・「日本語と類似した音」(No.69:精緻化)と同時に「日本語と似ていない音」(No.71)は覚え易い。つまりは日本語と英語との比較において顕著な類似性や相違性のある箇所は記憶に残りやすいようである。その一方で,「日本語と類似している音と結び付けて覚えようとする」(No.68)創意工夫は希薄である。

表2 平均値の高い項目：積極的な項目（5学年）

平均値3.95以上

セクション	番号	内容	5年 <i>M (SD)</i>	Mann-Whitney (塾の有無) <i>Z</i> (両側)
I	1	英語のゲームをする	4.37(.78)	-.094(.925)
	4	自分ではなしたことが先生にわかってもらえる	4.13(.92)	-1.319(.187)
II	23	英語で色(あか、あお、きいろ、みどり、しろ、くろ)をいえる	4.90(.36)	-.801(.423)
III	29	外国へりようこうにいきたい	4.25(1.07)	-1.100(.271)
IV	45	(もともと英語を話している国の)外国のけしき	4.21(.83)	-.065(.948)
	46	(もともと英語を話している国の)外国のスポーツ	4.22(.76)	-.930(.353)
VII	69	日本語と似ている音は覚えやすい(たとえば、ミルク、カメラなど)	4.39(.74)	-.276(.782)
	71	日本語と似ていない音は印象にのこって覚えやすい	4.23(.77)	-.410(.682)

表3 平均値の低い項目：消極的な項目（5学年）

平均値3.0未満

セクション	番号	内容	5年 <i>M (SD)</i>	Mann-Whitney (塾の有無) <i>Z</i> (両側)
VII	68	日本語と似ている音とむすびつけようとする(たとえば、one—(いぬの鳴き声の)ワン、so—そう)	2.95(.99)	-.276(.782)

以上のことから、日常生活において無意識に触れる頻度が高いと思われる刺激材料(ゲーム、簡単な名詞、海外に関する日常的トピック等)や日本語と英語の相違性や類似性については敏感であると解釈される。これらの項目を生かしつつ、既存の知識を有効利用できる記憶ストラテジーの指導も必要なのかもしれない。ただし、英語の音に接し、日本語の音声言語情報を介在せず、直接、英語として音韻認知できることが理想である。この点では、最初から英語特有の音韻に関する認知が困難な場合、初出の段階で母国語である日本語の音の類似性を介在しつつも、英語の正確な音声を繰り返し、数多くのインプットを与えることで学習者の記憶に定着させていく指導法が重要と思われる。

3.3 6学年

結果は表4及び表5の通りである。

これらの表から特徴として以下の点が挙げられる。

- ・簡単な数字(1~20)や色は英語で言える(No. 21, 22, 23)。
- ・海外旅行での英語の使用や英語圏のスポーツに興味を持つ(No. 29, 46)。一方で非英語圏への物や人に対する興味は希薄である(No. 48, 49, 51)。
- ・英語の綴りの違いに気付く(No. 58)とともに母国語の容易さ(No. 56)にも気づいた。その一方で英

表4 平均値の高い項目：積極的な項目（6学年）

平均値3.95以上

セクション	番号	内容	6年 <i>M (SD)</i>	Mann-Whitney (塾の有無) <i>Z</i> (両側)
II	21	数字の1~10までを英語でいえる	4.92(.487)	-.988(.323)
	22	数字の11~20までを英語でいえる	4.73(.694)	-1.922(.055)
	23	英語で色(あか、あお、きいろ、みどり、しろ、くろ)をいえる	4.89(.467)	-.268(.789)
III	29	外国へりようこうにいきたい	4.13(1.105)	-1.828(.068)
IV	46	(もともと英語を話している国の)外国のスポーツ	3.97(.975)	-1.392(.164)
VI	56	日本語のほうがわかりやすいと感じるようになった	4.09(1.052)	-1.754(.079)
	58	ローマ字と英語のつづりの違いを感じるようになった	4.00(.937)	-1.669(.095)

表5 平均値の低い項目：消極的な項目（6学年）

平均値3.0未満

セクション	番号	内容	6年 <i>M (SD)</i>	Mann-Whitney (塾の有無) <i>Z</i> (両側)
I	11	先生やみんなと英語の絵本をよむ	2.91(.892)	-.653(.514)
V	48	(英語以外を話している外国の)本(マンガもふくめて)	2.80(.877)	-.626(.532)
	49	(英語以外を話している外国の)ゲーム	2.73(.835)	-.683(.495)
	51	(英語以外を話している外国の)ひと	2.93(.938)	-1.953(.051)
VII	70	日本語と似ていない音は印象にのこって覚えやすい	2.97(.972)	-.691(.490)

語特有の音への記憶は優れていない(No. 70)。このことから、英語の難しさと日本語の容易さを認識していると推察される。

以上のことから、5学年同様、日常生活において無意識に触れる頻度が高いと思われる刺激材料(簡単な名詞)や日本語と英語の相違性や類似性については敏感であると解釈される。しかしながら、英語特有の音への難しさを認識しており、苦手意識を持たせない指導の創意工夫として、5学年同様、既存の知識を有効利用できる記憶ストラテジーの指導を行い、初出の段階で母国語である日本語の音との類似性を介在しつつも、英語の正確な音声を繰り返し、数多くのインプットを与えていく指導が必要と思われる。また、非英語圏への興味・関心の希薄さは、英語に触れさせる際に英語圏のみならず母国である日本も含め非英語圏の題材も取り入れ、グローバルな視野での異文化理解を育む指導が必要であり、教材(英語ノート等)の改作、開発等も含めた創意工夫が望まれる。

3.4 学年間（5学年，6学年）比較

3.4.1 6年生が5年生よりも高い項目

表6 6年生が5年生よりも高い項目

セクション	番号	6年が5年よりも高い $N = 259$			
		Z	p	r (効果量)	
II	13	-2.377	0.017	-0.148	小
	22	-2.382	0.017	-0.149	小
	27	-2.583	0.010	-0.161	小

表6は両学年間のMann-Whitney検定の結果である。6年生のほうが高い項目として、有意差($p < .05$)はあるものの、効果量(r)はいずれも小さく、特に6年生のほうが顕著な項目は見られなかった。

3.4.2 5年生が6年生よりも高い項目

表7は両学年間のMann-Whitney検定の結果である。5年生のほうが高い項目として、有意差($p < .05$)はあるものの、効果量(r)は小さいものが目立ち、「中」の効果量は7項目であり、主な特徴は以下の通りである。

- ・英語でのゲーム、歌、挨拶や周囲の人たちと英語の絵本を読むことが楽しい(No. 1, 3, 5, 11, 42)。
- ・自分の発話を周囲に理解してもらうことや相手に質問をすることが好き(No. 4, 8)。

表7 5年生が6年生よりも高い項目

(網掛けは「中」以上の効果量)

セクション	番号	5年が6年よりも高い $N = 259$			
		Z	p	r (効果量)	
I	1	-7.176	0.000	-0.446	中
	2	-4.538	0.000	-0.282	小
	3	-5.895	0.000	-0.367	中
	4	-5.761	0.000	-0.358	中
	5	-4.884	0.000	-0.304	中
	6	-3.386	0.001	-0.211	小
	7	-3.053	0.002	-0.190	小
	8	-5.948	0.000	-0.370	中
	10	-4.126	0.000	-0.257	小
	11	-6.070	0.000	-0.378	中
	II	18	-2.759	0.006	-0.172
20		-3.661	0.000	-0.228	小
25		-4.550	0.000	-0.283	小
III	30	-2.234	0.025	-0.139	小
	31	-2.095	0.036	-0.131	小
	32	-2.697	0.007	-0.168	小
	35	-3.778	0.000	-0.235	小
	36	-3.127	0.002	-0.195	小
	37	-3.338	0.001	-0.208	小
	38	-2.447	0.014	-0.153	小
IV	42	-4.828	0.000	-0.300	中
V	48	-2.179	0.029	-0.136	小
	49	-4.408	0.000	-0.274	小
	50	-2.877	0.004	-0.179	小
	52	-2.132	0.033	-0.133	小
	53	-2.834	0.005	-0.177	小
VI	54	-2.919	0.004	-0.182	小
VII	60	-2.018	0.044	-0.126	小
	62	-2.501	0.012	-0.156	小
	63	-2.739	0.006	-0.171	小
	67	-2.708	0.007	-0.169	小
	69	-4.580	0.000	-0.285	小
	71	-2.747	0.006	-0.171	小
	74	-2.842	0.004	-0.177	小

これらの特徴から、5年生のほうが英語による周囲とのコミュニケーションに関して好意的と言える。原因としては、5年生の英語学習期間が短いことによる英語に対する新鮮さ及び発達段階の特徴であるコミュニケーション活動への抵抗の少なさが推察される。

3.5 学校以外での刺激（塾や家庭学習等）の有無の比較：学校内のみでの英語学習者と学校以外（塾、家庭学習）も含めた英語学習者

表8は各学年における英語学習状況の違いが、学習者の心理的側面にどのような影響を及ぼすのかについてMann-Whitney検定及びその効果量の結果を示している。学習環境の違いによる心理的特徴の相違点として、効果量が「中」以上の項目を対象に考察していく。

3.5.1 5学年で学校以外の学習者が学校内のみでの学習者よりも高い項目

顕著な項目は以下の通りである。

I 外国語活動で楽しいこと

- ・周囲の人たちへの英語での質問(No. 8)

II 自己評価

- ・英語で言える項目が多い：

名詞—よくみかける動物、果物、野菜の名前(No. 15)、数字(11~20)(No. 22)

英語表現—天気(No. 13)、指示(No. 14)、好き嫌い(No. 16)、理解の有無(No. 17, 19)、家族の紹介(No. 24)、昨日の出来事(No. 26)、起床時刻の質問(No. 27)、許可の確認(No. 28)

多くの英語の歌(No. 20)

- ・英語以外への波及効果：

日本語(母語)でも数多くの自己の伝達、友人の話の理解(No. 18)、他の科目への取り組みも強化(No. 25)

III 英語を駆使したい内容

外国人の友人作り(No. 32)、英語以外の外国語の学習(No. 34)

VI 日本語と英語の相違への気付き

語順の相違(No. 55)、ローマ字と英語の綴りの相違(No. 58)、英語のほうが理解し易い(No. 57)

VII 英語の記憶と学習

速い発音箇所への注意(No. 63)、長いことばは印象に残り記憶し易い(No. 72)、声に出し繰り返す—リハーサル(No. 73)、1日のなかで授業以外に英語にふれる(No. 75)

以上のことから、以下の点が特徴として挙げられる。学校以外での学習も含む児童のほうが、英語に対し、好意的、積極的に受け止めており、日本語と英語の語順にも気づいている。記憶のストラテジーとして、速

く発音される箇所への注意や英語を繰り返すリハーサルを使用している、また、日本語で積極的に話せる（コミュニケーション能力の素地ができてい）子どもは、英語でも積極的に話せる傾向が見られる。

これらの結果は、原因として、学校以外での英語のインプット量の増加及び意識的な知識学習が英語及び英語に付随する様々な知識の習得にさらなる相乗効果を生んでいるのではないかと推察される。その一方で外国語活動の目標の一つである異文化理解に位置する「非英語圏への興味・関心」は特に差が見られない。英語を通して、非英語圏の文化にも興味・関心を抱かせるグローバルな視点に基づく指導も重要と言える。

3.5.2 5学年で学校内のみの学習者が学校以外の学習者よりも高い項目

顕著な項目は1項目のみ「日本語のほうがわかりやすいと感じるようになった」(No.56)である。この点は、学校内のみの学習者が英語の難しさを認識していると解釈され、指導の段階で英語嫌いを誘発しない創意工夫が必要と言える。

3.5.3 6学年で学校以外の学習者が学校内のみの学習者よりも高い項目

顕著な項目は以下の通りである。

- I 外国語活動で楽しいこと
 - ・英語の簡単な挨拶 (No.12)
- II 自己評価
 - ・英語で言える項目が多い：
 - 名詞—よくみかける動物、果物、野菜の名前 (No.15)
 - 英語表現—天気 (No.13), 指示 (No.14), 好き嫌い (No.16), 理解の有無 (No.17), 家族の紹介 (No.24), 昨日の出来事 (No.26), 起床時刻の質問 (No.27), 許可の確認 (No.28)
- III 英語を駆使したい内容
 - 外国人の友人作り (No.32), 日本語の不得手な外国人への補助 (No.31), 様々な本を読む (No.36), 外国人とメールの交信 (No.37), 外国の学校での勉強 (No.38), 英語を駆使する仕事 (No.39)
- V 非英語圏に付随する内容
 - 食べ物 (No.47), 景色 (No.52)
- VI 日本語と英語の相違への気付き
 - 語順の相違 (No.55)
- VII 英語の記憶と学習
 - 速い発音箇所への注意 (No.63), ゆっくり発音される箇所への注意 (No.61), 日本語との類似音の覚え易さ (例：ミルク等) (No.69), 1日のなかで授業以外に英語にふれる (No.75)

以上のことから、以下の点が特徴として挙げられる。

学校以外での学習者のほうが、5年生同様、全体的に好意的、積極的に受け止めており、顕著な差(効果量「中」以上)のある項目数は24項目で5年生と同数であるが、5年生と項目がいくつか異なる特徴として、主に次の四点が見受けられる。一点目は、英語を駆使して行いたい項目(外国人へのサポート、英語を駆使しての幅広い情報収集や仕事、海外の学校での勉強)が増加しており、英語への様々な形での接触量の増加に伴い、学習者の意識も向上してきているものと推察される。

二点目は非英語圏への興味・関心も生まれている。この原因については不確かであるが、少なくとも、子どもたちの世界観が広まっていることは確かである。

三点目は英語を記憶する際の認知レベルの発達である。速く発音される箇所だけでなく、ゆっくり発音される箇所にも注意を向けるようになっていっている。これは音声の様々な特徴にも気を付けるようになったものと解釈される。また、日本語と英語との類似音の覚えやすさを意識していることから、何らかの精緻化ストラテジーを使用している可能性がある。この点から、5年生(3.5.1で前述)が使用している初歩的なストラテジーであるリハーサルよりも高度な記憶ストラテジーを使用していると言え、英語の学習期間の相違のみならず認知発達の点からも注目に値する。外国語活動や学校以外での英語学習により、5年生に比べ学習年数、英語のインプット量が増加することで、語彙数や英語の処理プロセスの効率に関して何らかの発展的変容が生じたものと推察される。

四点目は、IIの項目において、5年生と同様の項目が目立つ中であって、5年生間の比較において示された「英語以外への波及効果」は6年生間の比較において差は見られなかった。この点については、次の二点が理由として推察される。一点目は、授業で初めて英語に接する5年生とは異なる一定の学習効果によるものかもしれない。二点目は、両学年とも英語ノートを使用しつつも、外国語活動での内容の取り扱いの違いによるものなのかもしれない。教材(英語ノート)等の取り扱いにおいて、他の教科や活動での既習内容と結びつけた指導を行うことで、学校以外での英語学習とは異なる学習の側面を促進することになり、外国語活動を通して、言語のみならず、様々な興味・関心を育成する可能性があるものと考察される。

3.5.4 6学年で学校内のみの学習者が学校以外の学習者よりも高い項目

特に顕著な差のある項目は見られなかった。項目番号68「日本語と似ている音とむすびつけようとする(たとえば、one—(いぬの鳴き声の)ワン, so—そう)」

表8 各学年の外国語活動以外の刺激（塾や家庭学習等）の有無の比較（網掛けは「中」以上の効果量）

セクション	番号	5年:学校以外も含む n=63			5年:学校内のみ n=47			6年:学校以外も含む n=87			6年:学校内のみ n=62			
		Z	p	r(効果量)	Z	p	r(効果量)	Z	p	r(効果量)	Z	p	r(効果量)	
I	5	-2.366	0.018	-0.299	小									
	8	-3.543	0.000	-0.447	中									
	10							-2.397	0.017	-0.257	小			
II	12	-1.991	0.046	-0.251	小			-4.479	0.000	-0.481	中			
	13	-2.943	0.003	-0.371	中			-3.250	0.001	-0.349	中			
	14	-3.830	0.000	-0.483	中			-5.223	0.000	-0.560	大			
	15	-3.381	0.001	-0.426	中			-2.976	0.003	-0.320	中			
	16	-3.619	0.000	-0.456	中			-4.789	0.000	-0.514	大			
	17	-2.537	0.011	-0.320	中			-3.535	0.000	-0.379	中			
	18	-2.513	0.012	-0.317	中			-2.775	0.006	-0.298	小			
	19	-3.931	0.000	-0.496	中			-3.996	0.000	-0.429	中			
	20	-3.601	0.000	-0.454	中			-2.060	0.039	-0.221	小			
	21	-2.024	0.043	-0.256	小									
	22	-4.569	0.000	-0.576	大									
	24	-3.728	0.000	-0.470	中			-3.886	0.000	-0.417	中			
	25	-3.458	0.001	-0.436	中			-2.084	0.037	-0.224	小			
	26	-3.575	0.000	-0.451	中			-3.979	0.000	-0.427	中			
	27	-4.290	0.000	-0.541	大			-3.900	0.000	-0.419	中			
	28	-3.907	0.000	-0.493	中			-3.689	0.000	-0.396	中			
	III	30	-2.247	0.025	-0.284	小								
31		-2.009	0.045	-0.254	小			-2.877	0.004	-0.309	中			
32		-2.464	0.014	-0.311	中			-3.302	0.001	-0.355	中			
34		-2.927	0.003	-0.369	中			-2.599	0.009	-0.279	小			
35		-2.001	0.045	-0.253	小									
36								-2.948	0.003	-0.317	中			
37								-3.339	0.001	-0.358	中			
38								-3.019	0.003	-0.324	中			
39	-2.203	0.028	-0.278	小			-4.094	0.000	-0.439	中				
IV	40	-2.236	0.025	-0.282	小			-2.662	0.008	-0.286	小			
	41							-2.029	0.042	-0.218	小			
	44	-2.303	0.021	-0.291	小									
V	45							-2.190	0.029	-0.235	小			
	47							-2.801	0.005	-0.301	中			
	50							-2.448	0.014	-0.263	小			
VI	52							-2.950	0.003	-0.317	中			
	54	-2.324	0.020	-0.293	小									
	55	-2.947	0.003	-0.372	中			-3.097	0.002	-0.333	中			
	56					-2.484	0.013	-0.363	中					
	57	-3.262	0.001	-0.411	中			-2.092	0.036	-0.225	小			
VII	58	-3.200	0.001	-0.404	中									
	60	-2.370	0.018	-0.299	小			-2.653	0.008	-0.285	小			
	61							-2.930	0.003	-0.315	中			
	62							-2.314	0.021	-0.249	小			
	63	-2.387	0.017	-0.301	中			-2.883	0.004	-0.310	中			
	68										-2.147	0.032	-0.273	小
	69							-2.803	0.005	-0.301	中			
	71							-2.185	0.029	-0.235	小			
	72	-2.535	0.011	-0.320	中			-2.339	0.019	-0.251	小			
	73	-2.429	0.015	-0.307	中			-2.328	0.020	-0.250	小			
75	-8.023	0.000	-1.011	大			-10.305	0.000	-1.105	大				

は効果量が小であり、両群において明確な差があったとは言えないが、以下のことが今後の課題も含め可能性としてあるのかもしれない。

学校内のみの学習者は英語の接触量が少ないことから、英語独特の音声のバリエーションが学校以外での学習者よりも乏しいと考えられる。彼らの英語の音韻認知の基本は母国語（日本語）の音声の基本とし、英語が入力された段階で日本語の音声に置き換えて考えている可能性があるのかもしれない。この点で、特に初歩的レベルの児童に対する英語の音声指導において日本語に基づく精緻化ストラテジーの有効な可能性を示唆しているのかもしれない。しかしながら、最終的には母国語の音声的特徴を介在することなく、英語特有の音韻認知能力の養成が必要であり、そのためには

ゆっくりとした発音スピードから徐々に自然なスピードに段階を踏んで英語の正確な音声を繰り返し、数多くインプットしていく指導が最も重要と言える。

IV まとめ：カリキュラム作成への課題

4.1 福島大学附属小学校の外国語活動の目標と現状の照合

外国語活動の学習指導要領及び本校の研究主題（今を生き、未来を拓く子どもの育成）に照らし、「学校内のみの英語学習者」と「学校以外も含む英語学習者」が共に活躍できる授業の展開が必要である。新たな英語の知識の有無とは直接には関係しない内容で、両方の学習条件の児童が共有する既存の知識を有効的に活用することが重要である。そのためには、外国語活

動が単なる言語（英語）に特化したものではなく、学校生活の様々な活動から得られる経験、知識を駆使し展開されるコミュニケーション活動でなければならない。外国語活動のトピックやタスクの設定において、既に他の教科や活動及び様々な学校行事等で学習した既存の知識に基づく内容を取り入れることで、外国語活動で英語がインプットされる際に、言語的知識として正確に理解できなくても、既存の知識を基に推論し活動を円滑に促進できる可能性があると考えられる。また、このような活動を通して、学校以外の学習条件（英語の塾等）では得ることができない貴重なコミュニケーション活動が展開されるものと言える。

異文化理解の側面から有効な例として、日本の小学生と英語圏の小学生の交流に関する研究である高井（2012）は、英語圏（アメリカ合衆国）において日本語を学習している日本にルーツのある小学生とのSkypeでの交流授業により、日本人小学生のアイデンティティの形成に正の影響を及ぼすと共に英語の学習意欲の高揚にもつながったと報告している。このような情報機器の有効利用により、教室にいながらにして広い視点で異文化を深く理解させる指導も選択肢の一つと考えられる。

4.2 『英語ノート』の利用における創意工夫

英語ノートの使用にあたり、この教材を利用しつつも現状にあった教材開発の必要性がある。坂詰（2012）は英語ノートの授業は知識構築に重点が置かれており、授業全体の協同性が下がるため、より積極的なコミュニケーションへの態度の育成をめざした体験的理解の促進には活用方法に工夫が必要と指摘している。この指摘から、授業担当者が如何に英語ノートを利用するかの技量にかかっていると見える。英語ノート等の教材の利用や開発において、学習者間で単なる知識（意味記憶）に縛られることなく、実際に日常的に馴染みのある場面、必要性を感じる状況設定に基づき、児童が言語を使用し、体験する（手続き記憶）ことが重要である。また、「音声に慣れ親しむ」という音声中心の指導を行う中で、特に6学年に顕著な記憶の精緻化が見られる本稿の調査結果から判断し、認知発達に伴い、言語の綴りの違いを認識し、緩やかな文字の導入を行うことも避けるものではないと考える（笠原他2012）。文字を示し、綴りを意識的に記憶させる指導はすべきではないが、絵と音声と文字をさりげなく提示して慣れ親しませる潜在記憶レベルのインプットが中学校での意味記憶中心の授業で間接的に活性化させる可能性を残すことは重要であると思われる。

注

1. 平成24年度から、文部科学省は今まで各公立の小学校に配布してきた外国語活動教材の『英語ノート

1』及び『英語ノート2』にとって代わり、外国語活動の一層の充実を図るため『Hi, Friends! 1』及び『Hi, Friends! 2』へとテキストを一新している。

謝辞

本稿は第11回小学校英語教育学会（JES）大阪大会（2011年7月17日 於：大阪教育大学柏原キャンパス）での口頭発表に基づき加筆修正したものである。本調査にご協力を頂きました福島大学附属小学校の児童、クラス担任や多くの先生方ならびに口頭発表でご意見交換をさせて頂きました多くの関係者に御礼申し上げます。

参考文献

- 笠原究・町田なおみ・長田恵理・高梨庸雄・吉澤小百合（2012）. 「小学校5, 6年生の語彙知識：音声, 意味, 文字の結びつきに関して」, *JES Journal* *Vo.12* (小学校英語教育学会) 90-101.
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社
- 永井崇（2011）「互いの関係性を深める外国語活動」『今を生き、未来を拓く その一瞬を見つめる教師のまなざし』福島大学附属小学校編 240-249.東洋館出版社
- 坂詰由美（2012）. 「協同学習理論の観点からの外国語活動授業分析」, *JES Journal* *Vo.12* (小学校英語教育学会) 125-135.
- 佐久間康之（2009）. 「公立小学校低学年の英語活動がもたらすリスニング力及び心理的要因への影響」, 『東北英語教育学会研究紀要』, 第29号, (東北英語教育学会) 1-15.
- Yasuyuki SAKUMA (2009). “Changes in Listening Ability and Psychological Factors Influenced by Elementary School English Activities” *Annual Review of English Language Education in Japan* *Vol.20* (全国英語教育学会) 221-230.
- 佐久間康之（2010）. 「外国語活動移行期における公立小学校中核教員の意識調査：現状と課題」『東北英語教育学会研究紀要』, 第30号, (東北英語教育学会) 29-43.
- 高井延子（2012）. 「英語活動を通じたアイデンティティ形成と英語の学習意欲の関連－英語圏における日本語学習者との交流授業から－」, *JES Journal* *Vo.12* (小学校英語教育学会) 74-89.

＜資料1＞

児童へのアンケート

I 外国語活動で楽しいこと

次のしつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：楽しくない 2：あまり楽しくない 3：ふつう 4：楽しい
5：とても楽しい

1. 英語のゲームをする
2. 英語でいろいろなことば（動物、くだもの名前等）をならう
3. 英語のうたをうたう
4. 自分ではなしたことが先生にわかってもらえる
5. 英語であいさつする
6. (いみがわからなくても) 英語をきく
7. (いみがわからなくても) 英語を声に出していってみる
8. 先生やともだちに英語で質問をする
9. 外国のおまつり (ハロウィーンとか) や人々の生活について習う
10. ちがう国のひととはなしをする
11. 先生やみんなと英語の絵本をよむ

II 自己評価

次のしつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：まだ、ぜんぜんできない 2：できない 3：どちらともいえない 4：すこしはできる 5：よくできる

12. 英語で「こんにちは」「お元気ですか」などかんたんなあいさつがいえる
13. きょうの天気を英語でいえる(「きょうは、よいてんきです」とか)
14. 先生が「本をひらいて」「すわって」などを英語でいっていても、いみがわかる
15. ふつう、よく見かける動物やくだもの、やさしいなまえを英語でいえる
16. 「わたしは、りんごがすきです」など、自分がすきなものを友だちに英語でいえる
17. 「わかりません」と英語でいえる
18. (英語をやっていたら) 日本語でも自分のことをたくさんはなしたり、友だちの話をきいたりできるようになった
19. 英語で話しかけられたら、いみがわかる
20. 英語のうたを2つ以上うたえる
21. 数字の1～10までを英語でいえる
22. 数字の11～20までを英語でいえる
23. 英語で色(あか、あお、きいろ、みどり、しろ、くろ)をいえる
24. 自分の家族のしょうかいを英語でできる
25. (英語をやっていたら) ほかの科目でも、がんばれるようになった
26. 『きのう、野球をしました』など、自分がきのうやったことなどを英語でいえる
27. 「朝 何時におきますか」と友だちに英語できける
28. 「トイレに行ってもいいですか」と先生に英語できける

III 英語を使ってしてみたいこと

次のしつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：ぜんぜん、やってみたくない 2：やってみたくない 3：どちらともいえない 4：やってみたい 5：とてもやってみたい

29. 外国へりょうこうにいきたい
30. 外国のことをたくさんしりたい
31. 日本語ができなくてこまっている外国の人をたすけてあげたい
32. 日本にいる外国の人ともだちをたくさんつくりたい
33. 外国にすんでみたい
34. 英語いがいの外国語も勉強してみたい
35. 日本のことを外国のひとにたくさん話してあげたい
36. 英語でいろいろな本をよんでみたい
37. 英語で外国の人とメールがしたい
38. 外国の学校で勉強したい
39. 英語をつかう仕事をしたい

IV 英語圏に付随する内容

次のしつもんは、「好き」か「好きではない」かをきくものです。しつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：ぜんぜん、すきでない 2：すきでない 3：どちらともいえない 4：すき 5：とてもすき

＜もともと英語を話している国(アメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダなど)について＞

40. (もともと英語を話している国の) たべもの
41. (もともと英語を話している国の) 本(マンガもふくめて)
42. (もともと英語を話している国の) ゲーム
43. (もともと英語を話している国の) 外国のテレビ番組や映画
44. (もともと英語を話している国の) 外国のひと
45. (もともと英語を話している国の) 外国のけしき
46. (もともと英語を話している国の) 外国のスポーツ

V 非英語圏に付随する内容

次のしつもんは、「好き」か「好きではない」かをきくものです。しつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：ぜんぜん、すきでない 2：すきでない 3：どちらともいえない 4：すき 5：とてもすき

47. (英語以外を話している外国の) たべもの
48. (英語以外を話している外国の) 本(マンガもふくめて)
49. (英語以外を話している外国の) ゲーム
50. (英語以外を話している外国の) テレビ番組や映画
51. (英語以外を話している外国の) ひと
52. (英語以外を話している外国の) けしき
53. (英語以外を話している外国の) 外国のスポーツ

VI 日本語と英語の違い

次のしつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：ぜんぜん、そう思わない 2：そう思わない 3：どちらともいえない 4：そう思う 5：ほんとうにそう思う

54. 発音の違いを感じるようになった
55. ことばの順序の違いを感じるようになった
56. 日本語のほうがわかりやすいと感じるようになった
57. 英語のほうがわかりやすいと感じるようになった
58. ローマ字と英語のつづりの違いを感じるようになった
59. ローマ字を習ったので英語のつづりを覚えやすくなった

VII 英語の記憶と学習

次のしつもんをよんで、1～5の数字に○をつけなさい。

- 1：ぜんぜん、そう思わない 2：そう思わない 3：どちらともいえない 4：そう思う 5：ほんとうにそう思う

60. 強く発音されるところに気をつける
61. ゆっくり発音されるところに気をつける
62. 弱く発音されるところに気をつける
63. はやく発音されるところに気をつける
64. きいてわからなくても文字で覚えようとする
65. きいてはつきりとわからなくても、きいたとおりの音を覚えようとする
66. 文字をみてわからなくても音で覚えようとする
67. きいてわからなくても、カードの絵や先生の顔の表情などでことばの意味を覚えようとする
68. 日本語と似ている音とむずびつけようとする(たとえば、one—(いぬの鳴き声の)ワン、so—(そう))
69. 日本語と似ている音は覚えやすい(たとえば、ミルク、カメラなど)
70. 日本語と似ていない音は印象にのこって覚えやすい
71. 短いことばは覚えやすい
72. 長いことばは印象にのこって覚えやすい
73. くりかえして声にだしていってみる
74. 心の中でくりかえしいってみる
75. 1日のなかで授業以外に英語にふれるように(きいたり、よんだり)している